

# かわのはなし

## 1. 皮と革

川村通商株式会社 鍛治 雅信

この冊子の表題に使われている〈かわ〉と言う言葉には2つの漢字が有ることはご存知でしょう。小学校3年生で習う〈皮〉と言う漢字と小学校5年生で習う〈革〉と言う漢字です。

〈皮〉は野菜や果物の皮、樹木の皮、動物の皮など生き物の表面を覆っている物を指します。

我々人類を含めて、この地球上にいる生き物は常に太陽の紫外線や風雨の自然に曝されています。そこで生き物の表面を覆う皮は、内部を守る為に非常に強靱な物となって行きました。中にはこれらの自然に曝されない環境で生育する生き物もありますが、それらの表面の皮は非常に軟弱な物です。

我々の祖先は、この皮に着目し利用し始めました。それも動物の皮です。

最初は小さな動物しか捕まえる事は出来ません。ネズミやウサギ程度の動物です。それらを捕まえ、食べる時に皮は硬く食べにくいので剥します。

テレビや映画でライオンやチーターが捕食する場面をよく見ますが、必ず皮を食い破ってから肉を食べます。つまり皮は硬く食べにくいのです。その硬くて食べにくい皮の最初の利用法が毛皮です。

この漢字を見ても解るように、毛皮は革ではなく皮の漢字を用います。

皮はそのまま乾燥させると硬くなります。

しかし、乾燥中に揉みほぐせば柔らかくなります。どうもテレビの話ばかり出て恐縮ですが、アラスカのイヌイットの人達がアザラシを獲り、その剥した皮を歯で噛んで柔らか

くした物を靴や服に利用しているのを見た方も多いと思います。あれが毛皮の原点です。

乾燥中に何度も揉みほぐしながら乾燥させると毛皮は出来ます。しかし、使いながら揉みほぐし続けないと徐々に硬くなって行きます。その毛皮も長く使っている内に毛は抜け落ちますが、皮の部分は残ります。

保温効果としての毛は無くなっても強靱な皮は残るので、あらかじめ毛を取り除き皮の部分だけ利用した物やそのまま使用している物が太鼓の皮です。

アフリカ等のように毛を残したままで使用する地域と、毛を取り去り白くきれいな状態で使用する地域があります。

いずれも皮を乾燥段階で目的の形に張って乾燥させれば出来ますが、日本の和太鼓の様に、乾燥後も物理的に繊維を叩いて、ほぐしながら張り続けて白くする場合があります。皮は乾燥段階で大きく縮むので、型に張って乾燥すれば乾いた高い音が出ます。

太鼓や鼓はもとより、沖縄の三線に使われるヘビ皮や三味線に使われる猫皮なども皮です。

又、乾燥させた皮は非常に強靱なので鞭や甲冑などにも使用されます。エジプトなどではカバの皮で非常に強靱で軽い盾を作っていました。

プラスチックと呼ばれる硬質の樹脂の合成に成功するまでは、皮は人類の入手できる最も強靱な物でした。しかし、この強靱な皮にも大きな欠点があります。

それは高温多湿になると腐ると言う事です。イヌイットのアザラシの毛皮も、アラス

カの気候だから使えるので、これをタイやインドネシアの熱帯に持って行けば確実に腐ります。もっとも、熱帯では毛皮は必要ありません。

この欠点を克服したのが革です。

この漢字は、動物の皮を両手でピンと張って形を整える所から来たと言われてます。この事から革には<あらためる>という読み方もあります。

**革命**や**革新**、**変革**や**改革**など物事を<あらためる>時の漢字に使用されるのはそのためです。

ところで、この革命と言う言葉は日本人が作った和製漢語である事をご存知の方は少ないと思います。現在、日本や中国の漢字文化圏で使用されている漢語の内、社会、人文、科学などの方面で使用されている漢語の大半が和製漢語です。

日本の文化は大きく中国の影響を受けて来ています。漢字を変形させた<ひらがな>や<カタカナ>は日本独自のものですが、その原型は中国の漢字です。

その中国で現在使用されている漢語の中に、多くの和製漢語が含まれている事は驚きです。

江戸時代の末期、鎖国政策で海外との接触を断っていた日本も開国に備え多くの人をヨーロッパやアメリカに派遣しました。

勝海舟が艦長だった軍艦咸臨丸はお馴染みですが、それに乗船してアメリカに行った人々の中に福沢諭吉や通訳のジョン万次郎がいた事をご存知だと思います。

彼らが目にした西洋の文化に驚いたのは勿論ですが、その日本に無かった文化をそのまま音訳するのではなく、漢字で意識した事が和製漢語の始まりです。

当時の日本人は漢字や中国古書に精通しており、その中の文字を使って新たな漢語を作りました。しかも漢語作りのルールに従って作ったのです。

これらの漢語は漢字文化の日本ではすぐ

に使われ始めました。一方、その頃の中国は<清朝>の時代でした。

1894年の日清戦争に敗れた中国は、外国との国力の差を感じ始めました。ちょうどその頃、広州で武装蜂起を企て、失敗した孫文達が日本に亡命します。そこで和製漢語に出会ったのです。

更に1905年に日本が日露戦争で勝利すると、明日の中国を目指す若者達が大量して日本に留学してきます。そこで学んだ和製漢語は瞬く内に中国国内でも使われ始め、今では和製漢語と言う事すら忘れられています。

残念ながら、その様な事象を現在の学校では教えていませんが、明治維新の頃の日本人は凄かったと改めて感心します。

現在の日本では新しい外国語はそのまま音訳で短縮のカタカナ表示です。例えばテレビジョンはテレビです。中にはパネラーなどの怪しい和製英語もあります。しかし、中国では今でも意識で<電機機>と漢字文化は健在です。

大きく話がそれてしまいましたが、革の凄さの説明です。

皮を革に変える事で、まずは腐らなくなりました。その為、革の使用できる場所が大きく増え、物理的に強靭さを求められる所には全て革が使用される様になりました。

皮と比べて革は物理強度においては多少劣りますが、それでも合成樹脂が発明されるまでは、最も強靭な物でした。

この皮を革に変えることを鞣しと言います。そしてこの鞣しによって革に変えることのできる皮を原皮と呼びます。

英語では革はleatherで皮は全てskinですが、原皮となるとその大きさにより皮もskinとhideに呼び分けられます。

今回はこの原皮の話を中心に進めます。